

東京の幼稚園今昔 (2)

山 村 き よ

戦後再開された公立幼稚園の状況と研究態勢

公立幼稚園再開園と新設園誕生

昭和二十二年四月、六月、九月と、相ついで再開園した園は二

七園(千代田区⑦中央区⑧港区④新宿区②文京区①台東区⑤)

つづいて上記のように多くの幼稚園が再開、新設された。

しかしその設備のおそまつなこと、ただ机と椅子だけの幼稚園があったり、窓ガラスがこわれたまま(小学校も同じ状態)であったのを、幼稚園の先生方によって雲竜紙のカーテンがかげられ、みかん箱に千代紙を貼って物入れにするなど……一枚でもガラスにひびが入るとすぐ貼紙できれいに貼り合わせるなど、当時の幼稚園や先生方の苦心と、現在の整備された幼稚園(その幼稚園の)とを想い比べて感無量のものがある。

その頃の私立幼稚園の発展に比べて公立幼稚園の増加は遅々たるものであった上に、東京都の公立幼稚園は都心部だけに片よつていたため、ビルの発展建設と並行してだんだんと園児が減少し(とくに中央区、千代田区の

東京都公立幼稚園の発展

(再開園よりの園数と教諭数)
都・幼・教沿革より抜粋

年度	幼稚園数	教諭数
昭21	27	96
22	34	127
23	36	140
24	43	184
25	47	201
26	50	223
27	52	252
28	57	285
29	59	308
30	63	299
31	63	322
32	64	332
33	64	316
34	65	315
35	66	323
36	76	372
37	79	389
38	84	395
39	93	447
40	107	577
41	120	643

一部が、昭和三〇年頃からクラスの人数が少なくて淋しい時代もあったが、経験年数の多い教員が二〇、二五名の園児を担任していて園児の立場からは実に恵まれた時代が、四、五年間は続いたように思う。

青空幼稚園生まれる

私が昭和二五年～二七年まで教育委員会指導部勤務のとき新宿区立第六小学校長が「地元の要求で幼稚園を校内に造りたいから先生を」と依頼をうけ、当分は社会教育課から母親教育の場として誕生するが将来は公立幼稚園に切り替えてくださるという約束で始められた青空幼稚園も、そのまま区長のすばらしい応援で各地区に誕生し、六年間に十一ヶ所もの青空幼稚園が新宿区内の学校内に併設されてしまい、校長先生が園長で、保育園からも私立幼稚園からも異様な目で見られるようになってしまった時、私でさえも多方面の先生方から意見を求められて苦しい答えをしていた当時を今でもはつきりとおぼえている。

昭和三八年、秋、文部省が幼稚園教育振興七ヶ年計画を打ち出す以前の四月、問題の青空幼稚園が一園を残して全部公立幼稚園に切り替えられ教職員は二回、三回と、都の選考試験をパスして二年目には全部正教員に任命され、待遇は五倍、六倍とはねあがり、そのよろこびの姿は、私立幼稚園の先生方の怒りと

ともに大きな話題となっていつまでも続いていたように思う。しかし新宿区教育委員会では先に誕生していた四園と教育内容を揃えるために常に研究会を催し毎月公開保育を行なっては研究活動を盛んにし、その指導には都教委指導主事の先生方や、現場の園長であった私などもたびたびよばれて行つては熱心な先生方の相手をし、ぐんぐん成果のあがっていることにおどろいたことも何度かあった。

東京都保育会の再開、その活動と全、保、連

昭和二二年頃は再開された幼稚園の数は少なかったが、兼任園長の中には非常に幼稚園教育に興味をもって熱心にご指導くださる方が多く、現場の声を聞いて研究活動をすすめてくださった。特にこの年四月からは学校教育法も公布され、第七章には幼稚園のことがはつきりとして小学校に準ずる位置づけをされ、保母も教諭に改められ、身分は「地方教官に任ず」という辞令をいただいで大変うれしかったことをおぼえている。当時私は港区立西小学校内にある西校幼稚園に勤務したので、文部省も近く、何かと好都合で地方から上京される園長先生たちと、幼稚園教育の位置づけがはつきりしたことに手をとって喜ぶあったものだ。

当時幼稚園教育に非常に関心をもっていただくようになった台東区

黒門幼稚園長小野先生が戦前の保育会を再開してくださり研究活動を盛りあげてくださったことも忘れられないことの一つ、数少ない会員はファイトをもやして幼稚園教育の内容研究や、環境整備の工夫など、どんな成果があがっていった。幼児の好む歌唱集を印刷したり、また創作「幼児の劇あそび脚本集」などの発行もできて、今から考えると時間的余裕が生みだされた昔がほんとうになつかしい。

戦前から故倉橋先生が常に口にしておられたことは「公私立幼稚園、保育園の先生方が手を取りあつて幼児教育の研究をすべきだ」といわれていたが、なかなか関東はまとまらなかった。それで（関西は早くからできていたが、）小野先生はじめ私立幼稚園からは青柳先生、その他幹部の先生方とおはかりくださつて、まず東京都保育連合会が23年の秋、黒門幼稚園で誕生した。そして全国保育連合会に加わり研究活動と親睦をかねた大きな団体ができあがり、倉橋先生が初代会長となられた。全国の幼稚園関係者も保育園関係者もいともなごやかに、賑やかに、一年に一度の大会を楽しむに待つようになった。（今回は東京の幼稚園令昔ということなので金、保、連のことは省略する）

文部省主催指導者講座や、各委員会誕生

昭和二年アメリカ教育使節団の来朝報告書にも幼稚園教育

のことが多くサゼッションを受けたためか、行政官の方々にもようやく幼稚園教育の重要性がわかっていただき、特に倉橋先生や、現在お茶の水女子大学附属幼稚園長の坂元先生方によって幼稚園界が、ぱつと浮びあがったように思う。

保育の手引、保育要領なども次々に生まれた。東京の幼稚園の現場にいた者何名かが各委員会のメンバーにも加えていただき、幼稚園教育の内容検討が始まったのもこの頃で、私も、二、三の委員会に参加させていただき、多方面の学識経験者の先生方が多く参加された会議が長時間をかけ、熱心に勉強せねばならないような機会を与えられて、ほんとうに嬉しかった。中でも忘れられない委員会の一つに「音楽リズム指導書作成委員会」ができた時で、委員長は山下俊郎先生、メンバーは音楽専門家の文部省諸井先生、真篠先生、教育大の小林つや江先生をはじめ音楽専門の先生方、動きのリズムでは邦正美先生、戸倉先生、山田光先生に若い体育専門の先生方と私など現場の者も加えていただき、こどもの歌を歌ったり、自由表現ということをはじめて行なってみるなど、若い幼稚園の先生方を動員して何回か日曜日を返上してのきびしい研究がなつかしくよみがえってくる。

とくにその仕上げにあたっては当時、竹早幼稚園におられた安藤寿美江先生（現、文京第一幼稚園長）お茶の水幼稚園の菊

池フジノ先生、私の三人で二日間も徹夜の仕事をこつつけて届けたのに、その資料は当時のGHQの〇〇女史の批判をうけて姿が変り、二五年度にあのような「音楽リズム指導書」が発行され、その説明会で「うごきのリズム」ということばの質問ぜめにあつて汗びっしょりになったときのことも今はなつかしい昔の思い出となつた。

東京都放送教育研究会幼児部会誕生

戦後小学校教育の中にも大きくクローズアップされてきたことはラジオ放送の番組を教育に取り入れて放送教育の研究會が盛んになつたことである。東京都放送教育研究会小、中、高が誕生して三年目にあたる昭和二九年春、幼稚園にもよびかけられて二、三の園のものが本氣になつて考へてみた。たしかにラジオの利用が幼稚園教育にも、効果があることをたしかめあつてゐる時でもあつたし、公私立幼稚園、保育園の先生方がしよに手を取りあつて勉強する場ができることは幼児にとつても幸せなことと幹部の者たちで相談の結果、三つの研究団体がそのまま団体加入することに決定し、部長には各団体の会長が毎年交代して、幼稚園部を盛り立て、研究し合う約束で東京都放送教育研究会幼児部會が誕生した。

その秋の東京大会で幼稚園部の会場を文京第一幼稚園で引き

うけ、第一回の研究会をもつたが、ちょうど、その頃テレビ番組でも幼児のためのものが週三回出されるようになっていたので、問題が多く、放送教育研究会では、保育内容でなくいつも番組の「よしあし」だけを問題にしてNHKの番組担当者に注文をつける会で終つてしまふような時もあったが、そのためにか(?)だんだんと番組内容も改善され幼児に興味のもてる番組が多くなつた。とくに最近では番組委員会もたれて幼稚園現場の者の声が多く反映したよい内容のものが毎日みられるようになってうれしい限りである。

しかしとかく自分の思う通りに子どもたちをうごかしたいと思ふ多くの先生方の中には、時間的に制約があつたり、与えられる放送内容を自園のカリキュラムに流しこめぬといわれて放送教育に疑問をもちつづけたたり、今もつて食はずぎらいの「テレビ不用論」をのべておられる先生方もあるようであるが……一〇〇%普及している家庭でのテレビ視聴を、教育的に指導するためにも幼稚園教育に上手に利用して効果をあげるべく努力せねばならないと、私は今でも放送利用の教育効果を信じてゐるひとりである。ラジオ、テレビ、共に教育番組の精選されている現在、昔から(十五年前から)つづけてきた放送番組への研究も無駄ではなかつたように思う。

今秋は第十七回全国大会が東京にて開催され、幼稚園部の会

場園は次の通り、

公立幼稚園（千代田区、富士見幼）

私立幼稚園（目黒区、たちばな幼）

保育園（中央区、明石町保育園）

どちらも昨年度からたびたび園内研究を盛んに行ない、準備にあたっておられる。

この放送教育の会メンバーだけは十年もの間を公私立幼稚園、保育園の先生方で手をつなぎ、なごやかに話し合いがもたれて研究資料を残し、一年一度の夏の合宿研究会が持たれるようになった。

現在の幼稚園界を想う

かきたいことは山積しているものの、また、紙面の関係もあり、ときどき個人的にわたることも多くなるので、最近考えていることの中味だけを次にのべてペンをおくことにする。（とくに前回にものべたように「公立幼稚園中心」で）

三年前に文部省から幼稚園教育振興七ヶ年計画が打ち出され、幸福にも幼稚園教育に一斉に目をむけて、「幼稚園教育にも春がきた」と四十年前を想い出し、同じ道に進む者たち、みんながよろこびあったものの……？

たしかに東京の公立幼稚園は昔の姿は全然想い出せぬまでに

発展整備されてきた。しかも都教育委員会をはじめ各区教委の幼稚園に対する認識はたかまり、それぞれの幼稚園の研究活動も東京都公立幼稚園教育研究会の組織がかたまって、園長会とは別の発展途上にあるように思われるが……。

現在は、私も私立の人間になって、広い幼稚園界がのぞけるようになったよろこびの反面には、どうにもならない多くの問題点にゆきあたり、私の心の底に次のような心配を残している。

○幼稚園の新設を一つの企業と考えて始める人たちのいること。

○多忙な雑事に追われて昔のように研究活動にとび込む人たちの少なくなったこと。

○幼稚園の教育効果を紙の上に表わしたい人たちが保育の姿を変えていくのではないだろうか。

○昨年度からあちこちに新設された保育科、保育短大の教育実習と実習園との関係や、その指導にあたる教師陣の不足。

○保育科卒業生の待遇を考えた時、未だに改善の道がひらけない私幼の経営のむずかしさ。

……など、など。

（聖徳短期大学）